

私が教員になった理由

物事には、「因果関係」というのがあります。「因とは……原因」で「果とは……結果」です。しかし、世の中の出来事はそう単純ではなく、1つの結果に対して1つの原因があるわけではありません。ですから、「あなたは、なぜ教員になったのですか？」と聞かれたら、「そうですね、話せば長くなります。」となるわけです。しかし、もし、「あなたが教員になろうと思った一番のきっかけは何でしたか？」とたずねられたら、私は即答することができます。それは「教育実習」です。

教員になるためには教員免許というのを取得しなければなりません。その教員免許を取るために必要な単位（最も重要な単位）に教育実習というのがあります。簡単に言えば「大学生の時に実際に学校に行って先生の見習いのようなことをする」ということです。多くの大学には附属学校というのがある、そこで教育実習をすることができます。私が行った大学にも附属学校はありましたが規模が小さくて教員を目指す学生全員を受け入れることができませんでした。そこで、自分が卒業した地元小学校にお願いして教育実習をさせていただくのです。私は、勝間小学校の出身でしたので、そこで大学4年生の時（22歳：下の写真は当時のもの）約1か月の教育実習をさせていただくことになったのです。

実は、その時。私は、あまり教員になるつもりはありませんでした。私の父親は高校の教員、母親は幼稚園の教員でしたので、両親の勧めもあり何となく教員養成課程がある大学に進学しました。しかし、私はあまり真面目な人間ではなかった、人から「先生」と呼ばれるような仕事はとてできないと思っていました。かといって何かやりたい仕事があったわけでもありませんでした。とにかく、その大学を卒業するためには、教員免許を取る単位を取得しなければいけないので、仕方なく教育実習に行ったというのが正直なところでした。

その実習で、私が配属されたのが6年2組でした。私は22歳、6年生は12歳ですので、子どもたちからすれば「先生というよりはお兄さん」みたいなものです。しかも授業をしてもそこはまだ大学生。下手くそですし、子どもの気持ちも分かりません。それでもクラスの子どもたちは、私を「真鍋先生」と呼ぶのです。生まれて初めて人から「先生」と呼ばれ、「この子たちの大切な授業なのだから精一杯がんばらなけりゃ！」と思ったのです。その1か月は、それまでのいいかげんな生活とは違って、それこそ命がけで一生懸命「先生業」をやりました。授業の仕方や子どもとの接し方もたくさん学びました。大学で学んだことは、直接通用することは少なく、やはり現場に出て実際に学ぶことの意義と同時に厳しさも身にしみて実感しました。

そんな中で、私には大きな悩みがありました。そのクラスのある一人の女の子だけが、私に反抗してくるのです。声をかけても無視。近づくだけで拒否するのです。そして、友達にわざとらしく「真鍋は、まだ本当の先生じゃないよな。授業なんてしてほしくないわ。先生なんて呼べんし。」なんて私に聞こえるように話しているのです。

みんなが「先生、先生！」と慕ってくれると思い描いていた私は、心の底から「ポキッ」と音がするくらい心が折れていました。この子とのことを担任の先生も知っていましたが、特に何もアドバイスはいただけませんでした。

その子との関係もそのままの状態、私は教育実習最後の日を迎えました。そして、その時に私はその子からももらった手紙を読んで愕然としました。その手紙には、「4週間、ありがとうございます。いろいろごめんなさい。真鍋先生は、とてもいい先生です。大好きです。私は先生とお別れするのが悲しいです。」と、とても丁寧な字で書かれてかれてあったのです。担任の先生は、そのことをちゃんと知っていて、敢えて何もおっしゃらなかったのです。この時、私は、何が何でも小学校の先生になりたい！と心の底から思ったのです。

あれから、36年が経ちました。

36年前の私→



天国から届いた手紙

私が、初めて担任をしたのは、採用2年目で、6年生でした。新採1年目は、体育専科でしたので2年目にして初めて「受け持ちのクラス」ができたのです。それからは、無我夢中でした。

学級経営がうまくいかず、上司（校長）から叱責され、授業が下手くそで保護者からの苦情が続き、子どもたちのトラブルに悩まされながら、それでも何とか笑顔でがんばっていました。1年目にクラスを受け待たせていただけなかった寂しさはとても強く、担任の子どもたちがいること自体が、とても幸せなことだったので……。そんな日々が何年か続きました。

ある秋の日のことです。当時担任していたある女の子（Aさん）のおばあさんが、放課後学校にいらっしゃいました。私に折り入って話がしたいとのことでした。Aさんは、お母さんと2人暮らしで、女子の間でしばしばトラブルになる子でした。お母さんは、娘を育てるために必死で働き、夜勤もし、娘の面倒を細かく見る余裕はなかったのです。Aさんもきっと寂しかったのでしょう。だから、友達にもわざと嫌なことをしたり、きまりを守らなかつたりしていたのかもしれない。

「先生、お願いがあってきました。Aの母親、私の娘ですが、一昨日倒れて入院しました。検査をして分かったのですが、病気がかなり進行していて、もう長くはないと言われました。」

「えっ。」

私は、返す言葉が見つかりませんでした。

「Aさんは、そのことを……。」

「うすうす知っていると思います。だから、今日、先生にお願いにきました。母一人子一人です。Aは、私の所で預かります。これからは、Aは落ち着かないと思います。学校での様子はだいたい分かっています。お友達にも迷惑をかけるかもしれません。でも、Aがかわいそうで仕方ありません。どうか、学校ではAを守ってやっていただきたいと思って、それをお願いしにきました。」

「分かりました。分かりましたが……。」

「いえ、何かしてくれというわけではないのです。ただ、このことを先生には知っておいてほしいだけです。できるだけ宿題はさせます。必要な物は買って持たせますので。」

私は、とても後悔していました。なぜ「分かりました。任せてください。」と言わなかったのかと。Aさんのおばあさんに逆に気を遣わせてしまいました。

それからしばらくは、あまり大きなトラブルもなかったように思います。子どもは大人が心配しているほど弱くはありません。小学生だって、自分の立場を自覚しますし覚悟もします。歯をくいしばってがんばるのです。そのがんばりは、もしかしたら大人より上かもしれません。

間もなく、Aさんの母親が亡くなりました。冬の日午後。お葬式には、クラス全員の子どもたちも参列しました。家の外で出棺を待っていた私たちに、Aさんのおばあさんは、

「皆さん、今日は寒い中ありがとうございます。Aとこれからも仲良くしてやってください。」

と、子どもたちに向かって深々と頭を下げられました。それで、子どもたちは全てを悟り納得したと思います。おばあさんは、泣きじゃくるAさんの頭を抑えて、私たちに頭を下げさせました。

その日、私が家に帰りますと一通の手紙が届いていました。差出人を見て驚きました。それは、亡くなったAさんの母親からの手紙でした。亡くなられる少し前に病床で私に手紙を書き、投函を頼んだのでしょう。私は、その手紙は、天国から届いた手紙だと思いました。

そこには、短いですが、とてもしっかりとした字で、「娘のことをお願いします。」といったことが書かれてありました。私は、親の愛情と強さを思い知らされました。その手紙を前にして、私は、何度も何度も頭を下げることしかできませんでした。